

第10回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成25年1月18日（金） 午前10時～正午

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 祥雲の間

出席委員（敬称略）：

池坊由紀会長，潮江宏三副会長，井上八千代委員，小泉雪奈委員，佐野真由子委員，
富永茂樹委員，長谷幹雄委員，畑正高委員，福西惟次委員，森田りえ子委員，山中英之委員，
山本淳子委員，塚本稔委員

事務局：

平竹耕三 文化芸術担当局長，奥美里 文化芸術都市推進室長，
北村信幸 文化芸術都市推進室文化財担当部長 ほか

- 1 開会
- 2 京都市文化芸術都市創生計画の取組状況について
事務局から報告
別紙のとおり意見交換
- 3 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<会長>

ここから、委員の皆様にご意見や御提案をいただきたい。

折角皆様お出でいただいたので、勿論御不明な点は事務局へ御質問いただいて結構だが、事務局とのやり取りというよりは、委員の皆様のお考えを述べていただく、または委員同士で議論を深めるという形にしたいと思う。委員の皆様から、こういうことをすれば京都の文化芸術がよくなるのではないかというような、幅広い見地からの御意見をいただければと思う。よろしく願います。

順にぐるっと御発言いただきたい。

<委員>

久しぶりに出席して、色々なことが随分具体的に進んでいると驚いた。

私どもに殊に関係があるのは、京都会館のことだ。大きな建物で、私どもの活動の場でもある。今後徐々に明らかになると思うが、どのような形になるか示していただきたい。先程の説明では、お試し期間の後、27年度内に開館するとのことだった。28年4月ではなく、27年度末までということなのかなど、近々分かるだろうか。

(舞台芸術を取り巻く) 在りようというのは数年で随分変わると思う。人も変わる。何らかの形で、舞台芸術に携わる方に、こういうものがいついつまでできる、こういうことをしたいということを仰っていただく方がよいと思う。1箇月くらいはオープニングの特別な催しをなさると思う。大きな目と言えば開館年全体だが、どういうことをなさるのか、ある程度枠を固めていただかないと、こちらも雲を掴むような状態だ。

それと全然違う話だが、東京に行くと「京都は修学旅行で行ったことがあるけれども、その後、行ったことがない」という方が案外多い。修学旅行で行ったのは勿体なかった、まだ京都に心が向かない年齢であった、という方が多い。“修学旅行再び”ということができないものか。そういう方たちにお出でいただいて、段々バージョンアップしていくという形、例えば芸術的なものも観ていただく、美術関係のものも御覧いただくということを、旅行会社も含めてお考えいただけないか、と思う。

<委員>

意見というよりは質問になってしまうが、二つある。

まず、HAPS(東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス)で空き家の紹介をされているとのことだが、最初に設定された目標値があるのか。あるとすれば、それを達成できたのかお伺いしたい。市民は、成果がどれくらい出たかが気になる。

二つ目が、これもHAPSだが、海外のディレクターやキュレーターの招聘についてだ。既に招聘したということだが、その一番の目的と、市民の暮らしにどのようにつながっているかということをお伺いできればと思う。

全体的に素晴らしい施策だと思うが、市民の目から見た時に、これはどういう意味があるのだろうか、というところが、もっと深く伝わるように書いてもらえると、市民も納得するのではないかと思う。

<会長>

事務局から回答できるだろうか。

<事務局>

京都会館のスケジュール等について御質問があったので、先にお答えする。開館の月までは未

確定だが、27年度後半には開館したい。先程、担当課長から御説明申し上げたように、10月末に実施設計と工事を一体としたデザイン・ビルドという契約を締結した。現在、実施設計を始めたところだ。現場の方は第一ホールの解体工事中だが、本体工事については実施設計が終わった後、25年の9月か10月からスタートして、約2年かかると思う。それから色々な準備をして、オープンにこぎ着けたい。オープニングの催しについては、これから検討を進めていくが、早急に考えていきたい。委員の皆様にはお世話になると思う。

<事務局>

HAPSについてだが、空き家のマッチングは、初年度の目標値としては5件だ。実際には6件達成できている。ただ、まだ東山には空き家が多く、モデルとなる事例を明らかにしていくことで、住民の皆様にもこういった活用の仕方がある、芸術家が住むことでまちづくりにつながるということを示していきたい。

また、海外キュレーターの招聘だが、去年はスイスのサンクト・ガレン芸術センターからディレクターをお迎えした。ヴェネチア・ビエンナーレでもアシスタント・キュレーターをされた方だ。京都にはたくさんの作家がおられるが、色々な京都の作家を見ていただくことで、海外でも京都を宣伝していただける。お互いにとってメリットがあったと思う。引き続き、続けてまいりたい。

<事務局>

京都会館について、若干の補足をさせていただきたい。

今回、2月予算市会に、25年度から開館後1年間まで、4年間の予算の議案を出させていただく。また、若干お貸しできる部屋も増えるので、条例改正の議案も出させていただく。市会で御議決いただければ、仕組みとしては整っていくので、できれば25年度早々には、オープニング事業をどれくらいの規模でどのようなことをしていくのか、重点的に進めていきたい。

<委員>

前回は申し上げたが、私は、京都に移ってきてようやくもうじき3年になるという新米だ。ここで話されているような文化政策を研究の対象としているということもあり、国や、他の自治体の文化政策に関わってきたということはある。

京都は外から見ると、少なくとも先入観のレベルでは、文化的にあまりにも充実した内容が最初からあるため、どのくらい文化政策が動いているか、逆にあまり突っ込んで考えない対象であった。こちらに移ってから、実際に生活の中で色々なことが動いていたり、こういう場に加えていただいたりする中で、非常に色々な努力をなさっているということが少し分かってきた。これだけの内実があるうえで、更に能動的な努力をなさって、しかもそれがかなり面白い形で動いているということが分かってきた。

今日改めて色々御説明いただいて感銘を受けているところだが、そのうえでなお感じることもある。こうして資料にすると、極めて充実したことが行われていると分かるのだが、それが現場の方たち、アーティストやマネージャーに、どれくらい実質的に響いているのかということだ。市の施策の有無に関わらず、自分たちは自ら努力して芸術活動を行っているのだという自覚をお持ちの方たち、また、むろん、一般の市民、観光客も含め、こうした公共のお金を使った施策というのが、それらの方々と、実際にどれくらい響き合っているのか。その点でも色々な御努力があることは承知しているが、支援の枠組を作るといって自体が自家撞着に陥らずに、実質的な意味を持ち、響き合っていくことができるのかということ、改めて考えてみるべきではないかと思う。

抽象的な話だが、事務局への質問というよりは、課題として申し上げた。

<委員>

言いたいことはたくさんあるが、時間もないので簡単に申し上げる。

先程取組状況について御説明いただいた。取組状況の説明も、時間の制約もあり、ごく簡明にしていたと思うが、資料1を見ると、重要施策群の説明が、少し偏りがあったと思う。

重要施策群3(1)「文化芸術と暮らし」というのは、条例で言うと、第8条関係になるかと思う。それから、(2)「文化芸術による地域のまちづくり」、こちらは第13条関係。8条と13条は相互に関係しているものだと私は理解している。暮らしというのは、地域で展開されるものであり、地域というのは暮らしを基本に作られていくものである。その意味で、この二つは関連していると思う。この辺りは、まだ構想中ということが多いが、どんなふうにつなぎながら進めていくのか、これからも考えて取り組んでいただきたい。

もう一つ付け加えると、重要施策群3は「文化芸術と社会の出会いの促進」ということになっている。私個人の理解かも知れないが、社会の中には、当然、産業が含まれる。計画改定版では、産業という文字が随分影の薄いものになったが、地域と暮らし、市民の生活ということで言うと、産業というのはやはり無視できない。この辺りも是非考えていただきたい。

それから、重要施策群3ではHAPSばかりかなり丁寧に説明されたかと思うが、この二つの条文との関係で言うと、「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」は、若手芸術家の育成ということもあるが、これはあくまでも、地域づくりに深く関連している。ところが先程委員からHAPSがどのように市民に還元されているかという質問があった。そのような質問が出てくる程に、HAPSと地域との関連が明確になっていないと思う。文化芸術企画課でも、もう一度改めて、この辺りの認識を持って考えていただきたい。東山に芸術家がパラシュートで降りてきたわけではないはずで、そこから地域がもう一度再生していくということの一部の事業だと考えたいと思う。そうでないと市民というのが出てこない。HAPSも第13条を特に意識して進めていただきたい。

<会長>

事務局から、補足や、認識について何かあるだろうか。

<事務局>

委員から御指摘他抱いたHAPSも含め、創生計画自身が、単なる文化芸術の振興ではなく、いわゆるまちづくりの視点を持った計画だ。計画の周知の中で、私も常々そう申し上げている。まちづくりの視点を常に忘れないこと、特に文化芸術と暮らしが遊離してはいけないというのは仰るとおりだと思う。

HAPSの事業は、元々、京都にこれだけ芸術系大学がありながら、京都で制作の場がないから出ていってしまう、それは京都にとって大きな損失であるという観点からスタートしている。これから元新道小学校をスタジオとして使っていく中で、地域とアーティストの関係を重視しているところだ。市民にも見える形で、アートがまちづくりに役立つものだとすることを訴えていけるよう、事業を進めていきたい。

<委員>

私は、芸術は門外漢で、あまりよく分かっていないので、こういう委員の資格があるか分からない。同友会でこういう構想があって、こういうふうに動いているということをお願いする。

伝統と歴史を重んじるまち・京都では、どちらかと言うと伝統が表に出ていて難しい点もあるが、私は、現代美術は京都でやるのが最も相応しいと思っている。私としては、できる限り新しいものを、この古いまちで発表できる機会を作ること、京都の都市格を引っ張り上げるとともに、ソフト・パワー、そのうちの一つである観光にも大いに寄与すると考えている。

現在、国際現代芸術祭の組織委員会を4月までに発足させるつもりで活動している。オール京都体制で持っていきたい。特に産業界については工業会、商工会議所、こういうものも含めてや

っていきたい。ところが、工業会と話していても、なかなかピンと来ないようだ。工業だから、ものづくりをするわけだが、そういうところでは、これからは芸術的なものもやっていかないと、ただ単に機械を作っているだけでは駄目なのではないか。そういうことも御説明して、オール京都体制、市も府も含めて、全体を盛り上げていきたい。

2015年、これから2年後の春を目指して、やっていきたいと思っている。京都市美術館も改修を考えておられるようなので、我々も芸術祭をやることを通じて、こういう美術館であれば面白いのではないかと提案を盛り込んでいきたい。

もう一つ、同友会の動きの中では、まちづくり研究委員会というのがあり、空き家対策などを考えている。ちょうど今京都市がなさっているのと並行して、我々も研究会を立ち上げているところだ。目に見える、実行可能な形でできれば面白いと考えている。おいおい色々な形で、皆さんにも同友会の動きを開示していきたい。是非御期待いただきたい。

それから、岡崎の京都会館について感想を申し上げる。今、改装という話になっているが、世界からお客さんと呼ぶということを考えるのであれば、何故もう少し大きなビジョンで岡崎全体をどうするかというふうに考えないのか。京都会館は、前田國男さんの名作かどうか知らないが、私にしてみればもう終わった建物で、何故、全部を潰して、ハッと目を見張るようなものを作らないのか。もちろんお金が要ることだが、そういうものを作るくらいの馬力が京都市にないのか、もっと元気を出してもらいたいと思う。

京都市美術館も改修計画があるということなので、外観は素晴らしいのだから、内装など、皆が目を見張るようなものにしないと、このままでは京都市はただの田舎町になると申し上げたい。

<会長>

活を入れていただいた。事務局から何かあるか。

<事務局>

厳しい活を入れていただいた。岡崎地域については、京都市は、一昨年、検討委員会を立ち上げ、平成23年に、世界に向けて岡崎を発信するというので、活性化ビジョンを策定した。その中で、私どもの所管している、京都会館、美術館、動物園、それぞれ長い年月市民の方々から親しまれているが、まさに再整備を進めているところだ。

色々な方が色々な御意見を仰るが、市の美術館については、文化財的価値もあるのではないかと、来年度の将来構想策定に向けて予算要求しているところだ。皆様の御意見をいただきながら素晴らしいものとなるよう進めていきたい。

<委員>

活の後で、申し上げることがどこまでパンチが出るかと考えていた。よろしく願います。

この審議会に出席するのは2回目だ。前は顕彰制度について見直すということで、何のために私はここに来たのだろうと思う程戸惑ったが、今日寄せてもらって意味が分かってきた。言いたいことがいっぱいあるなと思いながら座っている。

三つ申し上げたい。

この施策の一覧を拝見していると、国立京都伝統芸能文化センターと国立京都歴史博物館という二つの施策がある。私は、千葉県の佐倉市にある国立民俗歴史博物館が、何故京都にないのかとずっと考えている。成田空港との関連で、非常に政治力が働いたと聞いている。関東にあることは勿論構わないのだが、京都に歴史博物館を整備するというのであれば、「京都」歴史博物館ではなく、「日本」歴史博物館であるべきだと思う。伝統芸能文化センターについても、何故、「京都」と付けてしまうのか。大阪の文楽座も、大阪文楽座とはいっていない。是非、仮称である段階で、肝を据えて、もう一つ大きいポリシーを考えてほしい。特に歴史博物館については、私は非常に具体的なビジョンを持っている。ここでぶち撒けると皆さんに御迷惑なので申し上げない

が、御関心あれば、御担当の方、是非膝突き合わせて聞いていただきたいと思う。

それから、京都会館と京都市美術館が大改修を計画されている。先程、50年のスパンという具体的なイメージもあったが、ハード環境を整え直すというのは予算の問題もあって非常に厳しいお仕事だと思う。限られた予算の中でなさるのだから、とんでもない力でソフト力を結集しないといけないタイミングだと思う。どの程度のソフト力を結集しておられるのか御呈示いただきたい。例えば、美術館を新しくするというなら、どこをイメージされて、どの程度のことを考えておられるのか。例えば、金沢21世紀美術館にももちろん勝つつもりだろうと思うが、まさかあんなものはできないという程度の議論であるとすればとんでもないことだと思う。例えば姉妹都市のボストンの美術館に学びに行っておられるのか。何故、京都にボストン美術館の分館ができなかったのか、そういう反省の上に立って、50年100年の計があるべきだろうと思う。京都会館も美術館も、市民のための、というのは非常に大きな大事な要素だが、だからこの程度でよいだろうと終わってしまうのではなく、市民のためにだからこそ、やはり全国あるいは世界の人が足を運ぶ存在力を発揮してほしい。お金のかからないソフト力の方に、余程のパワーをかける必要がある。京都に来られる色々な世界の方に伺うと、京都の次に行きたいところということで、滋賀県のMIHO MUSEUMや香川の直島等が挙がる。そういう所に時間を割いて動かれる、レベルの高い方が京都にはたくさん来ておられる。そういう方が、美術館や京都会館に時間を割いていただけるようにしないと、仕事をなさる意味がない。

それからもう一つ、先程、HAPSという言葉は初めてお聞きした。「アーティスト・イン・レジデンス」とは違う言葉を敢えて使われるところにどれ程のコンセプトがあるのか。もう少し皆が一般的に使っているアーティスト・イン・レジデンスという言葉でよいのではないかとも思う。違う言葉を提案するというのであれば、余程の理念がないといけないと思うが、今の御説明からは私は理解できなかった。

先程、報告の中で元新道小学校を開放してスタジオにすると仰って、面白い動きがあると思った。15年程前、インターネットが世の中に広がり始めた頃に、今、佛教大学におられる高田公理先生からある構想を伺ったことがある。京都市の小学校で統合が進んで空き校舎がいくつも出ているが、それらを全部光ファイバーで結んでレジデンスにしてはどうかというものだ。世界の英知がそこに集まり、カレッジが三つ四つできて、それをつなぐだけでユニバーシティになると仰っていて、面白いことを仰る先生だと思った。オックスフォードかケンブリッジか京都か、と。印象に残っている。こちらの部局の担当でアーティストのレジデンスを進めていただいているなら、いわゆるフィロソファーあるいはサイエンティストのレジデンスも可能だと思う。京都を舞台に研究をとという呼びかけをされれば、それだけのコンテンツが京都にはあるのだから、世界の英知が集まる可能性がある。行政の中の縦割りにならないよう、ディスカッションを進めていただければと思う。

<会長>

ソフト・パワーの結集、HAPSのことについて、事務局から答えられることがあるか。

<事務局>

色々な御意見、励ましをいただいた。ソフト力を結集することは非常に大事だと考えている。市美術館については、まさにこれから、様々な方に御意見をいただきながら、在り方の検討を進めていきたい。後程、副会長の想いもお聞かせいただくのがよいかと思う。

国立歴史博物館については、御意見をまたお聞かせいただきたい。

<事務局>

HAPSとアーティスト・イン・レジデンスの違いについて申し上げる。

HAPSは、元々、京都には芸術系大学が多いが、京都に制作・発表の場がなく、卒業生は京都か

ら出ていってしまう、折角京都で学んでいただいたのに非常にもったいない、というところから発想されている。

京都に住み続け、制作、発表をしていただくという一連のこと、ただ単に住んでいただくというだけでなく、京都で作家として永続的に活動してほしいという趣旨の施策だ。レジデンスという要素もあるが、そのような狙いがある。これから市民の皆様に御理解いただけるよう、説明に努めていきたい。

<委員>

次の会合に行かなければいけないので、ここで発言させていただく。

地域の中で芸術を活かす、ハードだけでなくソフトを活かす、それから産業との連携。色々な御意見をいただいた。大変ありがたい。

京都会館についても色々な御意見をいただいた。今、図面もできてきているので、後出しで申し訳ないが、後程、委員の皆さんにお渡しする。京都会館はこういう機能を持ったものだということが分かる資料をお届けさせていただく。

本日はどうもありがとうございました。

(委員退席)

<委員>

資料2を拝見して、様々な施策をなさっているのだなと感じた。3点質問させていただきたい。

重要施策3(2)、先程も御指摘があったが、文化芸術による地域のまちづくりの支援、24年度は進捗なしというとても寂しいことが書かれている。市民として、これは何故なのだろうかということをお伺いしたい。進捗しなかったとここにお書きになるのは、事務局として辛かっただろうと思うのだが、お聞かせいただきたい。

それからもう一つは、最初に少しだけお聞きしたが、市立芸大は移転されるのだろうか。少し動いているということだったが。

もう一つは、埋蔵文化財のことだ。埋蔵文化財の発掘調査を実施とあるが、去年は成果がたくさんあり、その中でも、日本最古級の平仮名が、JR二条駅の西側で発掘された。それは平成23年11月に分かっていたと思うが、京都市考古資料館で発表されて、展示もあったと思う。今まで、日本最古の平仮名は讃岐の国で発見されたものだったが、平仮名文化の花が咲いた京都が平仮名を取り戻したというか、平仮名の発祥を何十年か早めたということで画期的な資料だった。マスコミにも取り上げられ、大きな話題になったと思う。それをスピーディーに展示いただいたのはよかったのだが、ごく一部が展示されたただけであって、これからどうなるのだろうかと大変注目している。施策としては比較的地味な分野ではあるが、是非大切に取り扱いさせていただきたい。

<事務局>

地域のまちづくりの支援について御質問をいただいた。これは、体系的な取組としての支援まではできていないということで、構想中とさせていただいた。実際には、立誠学区で文化芸術を切り口としてまちづくりに取り組んできたこともある。様々な人々の暮らしの中で文化芸術があり、それが色々なまちづくりの活動の中で現れてきていると思う。

市立芸術大学については、まだ明確になっているわけではないが、手狭になっているということもあり、そういう話があると聞いている。私どもの所管ではなく、今、具体的に申し上げることができない。

<事務局>

3点目の埋蔵文化財のことだが、委員御指摘のとおり、二条での発掘は昨年最大の成果であったらと思う。藤原良相の旧宅から最古の平仮名が発見されたということで、考古資料館で速報

展を行わせていただいた。世の中にどのように成果を還元していくのか、文化財の指定ということも視野に入れ、検討していきたい。

<委員>

個々の施策というよりも、普段、文化行政に感じていることを言わせていただく。

個々の文化活動を支援していくことも大切だが、それらをつないでいくという役割が行政の最大の力ではないかと思う。もっと連携の形を探ってもいいのにな、と思う。例えばHAPSと京都芸術センターと、どうリンクしていくか分からないが、もっとつなげるとか、同友会でやっておられる現代芸術祭と、他の現代美術の活動とをリンクさせるとか。つなげる行政の形があまり見えない。先程の京都会館についても、コンサートホールとどう棲み分けるか、リンクするか、そういうこともあってよい。

京都市美術館で言うと、ハードも大事だが、ソフトだ。京都画壇の歴史を見ようと思っても、まとめて見られる場所がない。市美術館の所蔵品は豊かなものがある、常設できちんとやれば、そういうことができるはずだ。陶芸でも染織でも同じだ。美術館が80周年で今後の未来を考えていくというなら、そういうことも考えてほしい。

それと、京都市美術館は、京都の美術の中核として位置付けてやるだけの価値がある館だ。美術の活動をつなげていくということも考えてほしい。京都国立近代美術館や国立博物館、文化博物館、4館で連携する仕組みもできているが、今一つ見えにくい。これから模索していけば、総合力として見えるのではないか。もう少し行政がつなげるということをやっていけば、文化活動が効果的に盛り上がるのではないかと思う。

<委員>

市立芸術大学が移転するというのは、どの辺りというのは決まっているのか。

私は市立芸術大学の出身だが、私が学生の頃は東山七条にあった。まちの真ん中、智積院の隣で京阪からも歩いて行ける所だった。まちの中にあつたので、動物園等に写生に出かけて、また学校に戻ってということができた。西山の方に移転してから、私は2、3回しか行ったことがないが、ものすごく不便だ。驚く程時間がかかる。周囲の環境に文化的なものも乏しい。ああいうところに芸大があるというのはいかがなものかと思っていたので、芸術大学ができるだけまちの中に戻ってくることを期待している。

私の知人の話だが、京都駅でタクシーに乗って「京都芸大をお願いします」と言うと、何と京都造形芸術大学に連れて行かれたということもある。それくらい、市立芸大はしょぼんとしてしまっている。今後も市立の大学として発展するために、できるだけまちなかに戻ってきていただきたい。

それから、私事だが、今年の4月から母校の客員教授に任命されることになった。今年から若手の芸術家の育成に少しでもお役にたてればと思っている。よろしく願いいたします。

<事務局>

市立芸大については色々取沙汰されているが、できるだけまちなかにという意見が多いと聞いている。副会長が前学長でおられるので、詳細はお答えいただければと思うが、私どものセッションでは、美術学部は岡崎に、音楽学部はコンサートホールの近くに、と勝手に申し上げている。分けるのは駄目だとも言われており、明確に場所が決まっているわけではないが、できるだけ一緒に考えられているように聞いている。ただ、数年以内という話ではなく、10年後くらいのことだろうと何となく庁内では言われている。御期待を裏切るようなことかも知れないが、そのような状況だ。

先程の連携を深めるべきだという御意見については、我々もいつも気にしているところで、文化芸術の中でもなかなか縦割りが解消できないところがある。芸術センターとHAPSなど、若手を

育成するという意味では同じことをやっているところだ。人的なつながりの中で連携している部分はあるが、仕組みの中ではできていないということもある。問題意識は持っているので、できるだけ良い形で、最後には大きく発信していただけるように、努力してまいりたい。

<委員>

最初に、文化芸術の創生ということで、私が思う基本的なことを申し上げる。

文化芸術は、縦と横の広がりがあると思う。縦はそれぞれの分野で深めておられるので、そういう深化は行われている。もう一つは横の広がり、先程から皆さんが仰っているように連携ということがあがるが、もう一つ、裾野の拡大ということも重要だ。

重要施策の中にもあるが、人材育成、子どもたちを文化芸術の場に引っ張り出すということだ。最近、なでしこジャパンの活躍もあって、急にサッカーの人口が拡大しているが、そういうサポーターを、文化芸術でもたくさん作る必要がある。特に小学生だ。私の仕事上の経験だが、立命館大学のコンサルティングをした時に、いかに小学生を呼び込むかということをお願いした。それが小学校の設置につながっているわけだが、そういうファン作り、サポーター作りがまず重要だ。特に、子どものうちに体験することが重要だ。私もお祭りが好きで、色々な活動をしているが、それは全て、子どもの頃に両親が強制的に参加させる中で、段々好きになったからだ。今でもお祭りと聞くと血が騒ぐ。子どものうちに、踊りにしてもお花にしても、いかに分かりやすくやるかということだ。

20年程前、梅原猛先生のお孫さんとうちの子がたまたま同級生だったもので、担任の先生も交えた雑談の中で色々お伺いすると、なかなか国際日本文化研究センターが理解されていないようだったということだった。日文研の先生方が小学校で講義してはどうですか、本当に日文研の先生方が専門家であれば小学生にも理解させることができるはずだ、と申し上げた。試しに実行していただいたら、小学生からも評判がよくて、何年か続いたようだ。子どものうちの体験はずっと残る。一方通行ではなくて、体験をさせる。先程の市立芸大も毎年小学校でオーケストラの演奏なさっているが、小学生に指揮をさせる。佐渡裕さんなんか小学生を引っ張り出して、指揮をさせる。まあできるわけがないけれども、オーケストラの方がしっかりしているから、何とか形にはなる。そういう経験が非常に生きる。是非とも、ファン作り、小さい子どもに体験させるということ、重要施策群 1(3)にもあるが、より拡充していただきたい。

ついでに、重要施策群 2(3)、国際的な交流という観点で申し上げる。最近日本語が上手な外国人に、どこでそれを学んだと聞くと、大半がマンガやアニメだと答えるそうだ。京都にはマンガミュージアムがあって外国人も多く訪れる。これをもっと活用して、外国人にマンガやアニメに親しんでいただいて、ついでに色々なものを体験するというのであれば、国際交流になる。京都の人は慎ましやかで、どちらかというと自ら発信することが苦手だ。今や広報の時代だから、対外的にアピールしていく必要がある。こういう観点からもマンガミュージアムを活用していただきたい。

<副会長>

先程、美術館のリニューアルの話題が出たが、館では私を中心に検討を進めている。美術の場合、50年、100年というのはなかなか難しいので、30年くらいのスパンで、もう一度力を蘇らせるための計画を考えている。

柱は、先に委員の仰っていたことを全部含んでいる。一つは、本館を常設展ができるようにする、ということ。もう一つは、コンテンポラリー・アートと、工芸の部門を作ることだ。もちろんそのためのハードが必要で、そこまでするとかなりお金もかかるということで、今、本庁とやり取りをしている。

基本的には、海外の特別展や、伝統的なものも見せながら、金沢まではいかないがその70%くらいの、若い人たちが楽しめるコンテンポラリーのブースもあるということを考えている。そう

いう美術館を構想している。

財政状況が難しいので、一応絵は描いたが、折衝中ということだ。

足りないものが何であるか、この1年、美術館の中において色々考えた。勿論、外にいた時も同じようなことを考えていた。ソフトの面で、美術館は非常に脆弱な状況だ。そこをどう充実するか考えていく必要がある。組織が大きくなるということであれば、直営をやめて、もっと自由度を持って、我々が稼いだお金は我々で使えるような仕組みにできないかということも考えるが、これも今から話をしていかなければならない。

今までの美術館に比べると妄想に近いようなことになるが、そんなことも含めながら考えているところだ。是非とも、お力添えいただきたい。30年先を見据えた計画でないと美術館は再生しないとと思っているので、よろしくお願ひしたい。

芸大の移転の話は、法人化の交渉の中で、大半の教員がまちなかに移るべきだと考えた。そうでないと学生たちが、美術館にもギャラリーにも行かないという状況が解消できない。何よりも、京都のまちなかの創造力を肌身で感じる事ができない。そういう状況は改善しないといけない。音楽に関して言うと、芸大から楽器を持ってコンサートホールまで移動するのも、非常に大変だ。それも解消しなければならない。可能な限りまちなかの便利なところにとということ話をしている。先程、閉校した小学校をつないでユニバーシティにとという案も御紹介いただいたが、小学校の跡地というのは、少し手狭であったり、使いづらい部分もある。跡地の中から選択されるだろうとは思いますが、その辺の使いづらさを解消しないと、場所は定まらないと思う。ともかく、その方向で皆努力をしているということだ。あの場所に移って30年経つので、建物も直さなければならぬが、直すコストと、新しくするコストを考えれば、移転の方が意味があるのではないかということだ。

先程、小中学生の教育との連携の話もあった。私が学長の時に言い出したのだが、教育委員会も動いていただき、私立の芸術系大学も集まっていたいて、現在では、教育委員会と芸術系大学のコンソーシアムができています。教育委員会が積極的に芸術系大学の力を借りて、芸術教育、特に音楽よりも美術教育の足下が脆弱になっているので、その部分に力を入れているところだ。個々の大学で色々な試みをしており、市立芸大の場合も、境谷小学校にアトリエを置いて、そこで学生が絵を描くということをしている。ただ、問題はやはり、通常のカリキュラムの中にどうやって落とし込むかということだ。これは教育委員会が参加しないとできない。そういうところまでようやく到達したので、今後、少しずつ進むのではないかと思う。こういうことが少しずつできていく京都というのは、京都育ちではない私からするとすごいことだと思う。

質問が一つだけある。資料1、重要施策群2(3)の国際交流だが、これは文化芸術都市推進室でなさるとのことだろうか。事業主体が少し分からない。

<事務局>

事例としては、文化市民局で所管する京都国際舞台芸術祭を挙げさせていただいている。会場は京都芸術センターが主会場であった。そのほかにも色々想定されるが、基本的には文化芸術都市推進室の事業ということだ。

<会長>

本日は計画の進捗状況の確認、評価であった。実施しているということだけに満足するのではなく、それが地域でどのような受け止め方をされ、還元されているのか、見えない部分も伝わって初めて、文化として有機的に伝わるのではないかと感じた。

国際的な文化芸術都市として恥ずかしくない在り方ということで、グローバルとローカルの両立の必要性という話もあったと思う。

委員の御意見を踏まえて、京都市の方で、今後の取組のことなど何かあるだろうか。

<事務局>

素晴らしい御意見をたくさんいただき、どうもありがとうございます。

創生計画に掲げられている各施策について、構想中のものも含め、先程委員が仰ったように、市民、様々な団体、芸術家の皆様と連携していくことが重要であると考えている。

また、市民や地域に分かりやすく情報発信されているということが重要であるとも考えている。

来年度の予算要求をしているところで、重要施策群の中でも触れているが、芸術家を支援する方のネットワーク、「京都文化芸術コア・ネットワーク」を作っていこうという予算も要求している。

また、京都国際現代芸術祭の開催準備も、様々な主体が連携する中で、予算を要求しているところだ。

今後の取組については、創生計画は幅広い内容だが、委員の御意見を踏まえ、いっそう連携を深めていきたい。

なお、塚本副市長からも申し上げたが、京都会館再整備の資料について、基本設計の段階のものだが、後日、配布をさせていただく。

<会長>

本日は、様々な御意見があった。事務局からは、今後も、適宜、委員に状況を報告いただくようお願いする。

それでは、本日の議事は以上で終了させていただく。活発な御発言をいただき、また、議事進行に御協力いただき、ありがとうございました。

(以上)